

# アイヌ文化を継承した少女

知里 幸恵

銀の滴降る降るまわりに  
金の滴降る降るまわりに

(『アイヌ神謡集』より)



〔知里幸恵「銀のしづく記念館」蔵〕

知里幸恵は、一九〇三年六月八日、登別村（現在の登別市）でアイヌ民族の両親の間に生まれました。

しかし、小学校に入学する前に家庭の事情により、旭川に住む伯母に預けられることになりました。この旭川への移住が、幸恵の人生の大きな転機となったのです。

明治維新以来、政府は蝦夷地を北海道と改め、役所を置いて開発を進めました。アイヌ民族は、土地や漁場などの権利を失うとともに、日本語を使うことや日本式の名前を名乗ることをしいられ、アイヌ民族の伝統的な文化や習慣を禁止されました。

一九一七年、幸恵は、旭川区立女子職業学校を受験し、四番という優秀な成績で合格しました。アイヌ民族の女

性としては初めての合格でした。

しかし、幸恵は、アイヌ民族だという理由で、同級生に受け入れられませんでした。ある時は、「ここはあんたの来るところじゃないわよ。」と、胸に突き刺さる一言を投げつけられました。その言葉に幸恵は涙を流し、人目から遠ざかろうとしました。いくら努力してもアイヌ民族というだけで、苦しい生活が続きました。

一九一八年の夏、そうした幸恵に再び大きな転機が訪れました。言語学者である金田一京助との出会いです。金田一はアイヌ民族の言葉や伝承の記録を続けていました。そのため、金田一は、アイヌ民族の習慣や言葉を伝承できる幸恵の祖母たちを頼り、ユーカラを聞くために旭川を訪れました。

幸恵は遠い東京にいる言語学者が、わざわざユーカラを聞きに来たことを不思議に思いました。

「私たちのユーカラは、そんな値打ちのあるものなのでしようか。」と質問した幸恵に対し、金田一は熱っぽく答えました。

「あなたたちアイヌのユーカラは貴重なものです。今の世に、文字ではなく口伝で叙事詩の姿をそのまま伝え

ている例は、世界にユーカラの他にはありません。」

幸恵は涙を浮かべながら、「私はこれまでアイヌのことについては、何でも恥ずかしく肩身の狭いことだと思ってきました。でもそれは間違っていたと気付き、今、目が覚めました。私も生涯を祖先が残してくれたユーカラの研究に捧げます。」と誓いました。

一九二二年五月、十九歳の時、幸恵はアイヌ民族の文化を守り続けるまたとない機会であると考え、心臓の病を抱えたまま東京の金田一の家に住み込みました。

しかし、幸恵の健康状態は次第に悪化し、八月には、無理を重ねたことで心臓発作を起こし、安静にしていなければ命に関わる状況になりました。それでも幸恵は病をおして、原稿の最終校正を続けました。

この本を完成させることは、自らの命を失っても成し遂げる自分の使命だと考えていたのです。



[知里幸恵「銀のしずく記念館」]

九月十八日、「アイヌ神謡集」と名付けられた原稿の最終校正を終えた夜、幸恵の容体は急変し、その日のうちに息を引き取りました。十九歳という若さでした。

そして、翌年、幸恵が見ることができなかった「アイヌ神謡集」が、ついに出版されました。

幸恵が亡くなった現在も、アイヌ民族の伝統文化を伝承しようとする動きが各地で見られます。

一九〇三	登別村（現在の登別市）で生まれる
一九〇九	伯母が住む旭川市に移り住む（六歳）
一九一〇	上川第五尋常小学校に転校する（七歳）
一九一七	旭川区立女子職業学校に合格する（十四歳）
一九一八	金田一京助と出会う（十五歳）
一九二〇	女学校を卒業する
一九二一	心臓病のため絶対安静となる（十七歳）
一九二二	ユーカラ筆録ノートを金田一に送る（十八歳）
一九二二	上京し、金田一家に身を寄せる
一九二二	「アイヌ神謡集」の最後の校正を終え、死去する（十九歳）
一九二二	「アイヌ神謡集」が出版される
一九九〇	旭川市立北門中学校に、知里幸恵文学碑が建てられる
二〇一〇	登別市に知里幸恵「銀のしずく記念館」が開館する

\*ユーカラ：アイヌ語で語られる英雄や神々の物語など  
\*叙事詩：伝説や英雄の行いなどを、物語のように述べた詩